

燈標施設と我國の現状

遞信省燈臺局工務課長 工學博士 石川源二



工學博士 石川源二氏

Dr. G. Ishikawa

◆一體燈臺の仕事、むづかしく言へば航路標識事業といふものは隨分古くから開けたもので、既に西暦前300年の頃、埃及アレキサンドリア港のハーロス島に建てられた女神像の手に松明を焚いたのに濫觴し、爾來逐年發達し來つたもので、殊に英國は古くから同事業に努力して來た。

◆從つて、今日世界に於る燈臺事業は可なりの進歩發達を示してゐる。事實、その仕事も近年一般に認められつゝあるやうだが、翻つて我國の現状を考へるご、尙未だしの感深きものがある。先づ燈標數に於て我國は非常に劣つてゐる。少し調査が古いが、大正十二年末の世界各國の燈標數の對海岸線比較表に依るご（記者註、詳細は本號工事タイムス欄參照のこと）首位の和蘭の2,04に對し、我國は最下位にあつて情ないかな實に 39.42 といふ數字を示してゐる。

◆米國では從來の施設から一步進んで、霧信號にラヂオ、コンパス法を採用し、更に同國及カナダでは水中信號法をも利用するまでに至つてゐるが、我國は前述の如く燈標數に於て不足せる上、普通用具すら未だ完備せざる有様で、他になすべき事甚だ多くして、新しい器具工法等を採用するなさいふ事は、當分思ひも及ばない狀態にある。勿論是は豫算の關係ではあるが、一面國民の注目を促したいと思ふ。

◆そこで今後の問題、即將來發達の道程如何といふことになるが、私の見る處では、燈臺の目的が航海の安全を期するにある以上、その施工方法がなるべく経費を省いて、實用的に向ふことは争へない事實だと思ふ。是は獨

り燈臺に限らず
萬事經濟思想を
主とするからで
漸次燈臺の形式
及照明方法が實
用化し、且實用
化せんこしつゝあるのである。

◆浮標に就て考へて見る、浮標は低い、小さい、光が弱い、だから、丈が高く、光力も強く、然も略同じ位の費用で出来る燈標の方が好いといふことになる。

◆最初は光を如何にして出すかの問題であつたが、光源として石油、瓦斯、電氣と順次採用され、レンズも追々理想的に製作せられるに至つたが、何分このレンズが恐しく高い、從つて、レンズを要せずに済めば是位經濟なことはないといふ風に考へる。

◆現にカナダあたりでは、光源が完全ならばレンズの代りに金属性の反射鏡で充分だと言つてゐるし、佛國のソオターハアレーといへば世界有數のレンズ専門工場であるが、其處ですら近頃はメタル反射鏡の使用を力説してゐる位で、一定の光力があれば、費用の點から言つて反射鏡を使用する方が宜しい。

◆佛國ジロンド河の下流にあるコルディワン燈臺は十七世紀の頃、長い歲月を費して建設されたもので、その内部には300人を容る、に足る禮拜堂まであるといふ宏大なものであるが、是は當時、實用といふ事よりも美術、裝飾といった觀念が重んぜられてゐたからこそ建設されたのであつて、現今では夢にも考へられないことである。